

中国の小麦食圏における都市住民の米食普及 —主に石家庄市における消費者アンケート調査から—

青柳 齊 (新潟大学農学部)
伊藤 亮司 (新潟大学農学部)

The Spread of Rice Consumption of Urban Residents in the Wheat Consuming Provinces of China: Based on Consumer Questionnaires in Shijiazhuang City

Hitoshi Aoyagi (Faculty of Agriculture, Niigata University)
Ryoji Ito (Faculty of Agriculture, Niigata University)

In China, the per capita rice consumption of rural residents in provinces where the staple food is rice has been decreasing since 1991. In contrast, in provinces where the staple food is wheat the per capita rice consumption has increased. It is assumed that in provinces where the staple food is wheat, the rural residents' tendency to increase the rice consumption is fairly preceded by the urban residents. To investigate this phenomenon, consumer questionnaires were administered to residents in

the city of Shijiazhuang. The result revealed that the weekly consumption of rice was more than that of wheat. In this context, the urban residents come from the wheat consuming provinces and have tasted rice only in recent years, yet rice has already become the staple food for a majority of urban residents. Therefore, the rice consumption of urban residents in the provinces where wheat is the staple food is expected to increase in the future.

1. はじめに

米国農業部の統計によれば、中国国内の米消費は、1人当たり年間消費量で1991年の109 kg(精米換算)、総消費量では2001年の1億3,650万トン(同)が最大であった。そして以後は一貫して減少しており、07年でそれぞれ97.7 kg、1億2,910万トンに低下している。その傾向は小麦消費についても当てはまる。

また、都市よりも穀物消費量が多い農村住民の1人当たり「食糧」¹⁾の年間消費においては、『中国農村住戸調査年鑑』によれば、1970年代末にはまだ「細糧」(米・小麦)及び「粗糧」(コウリャン、トウモロコシ、豆類、雑穀)・薯類がそれぞれ125 kg前後(粳ベース)であった。そして、両者を合わせた食糧総消費量では250 kg強の水準で、2000年まではあまり変動せずに推移する。但し、食糧消費の構成内容では大きく変わり、80年代に入ると米及び小麦生産の増大とともに「粗糧」・薯類の消費量は急減する。他方、「細糧」の消費量は

急増し、80年代半ば以降には210 kg前後に達し、その水準は2000年頃まで横ばいで推移する。そして、01年以降から農村住民でも食糧総消費及び「細糧」の消費量も減少傾向が明確になる。06年現在でそれぞれ206 kg及び178 kgまでに低下している。

但し、以上の食糧消費の特徴は、中国国民ないし農村住民1人当たりの平均的数値でみた傾向である。中国における米、小麦、トウモロコシ等の食糧作物の生産には大きな地域性があり、農村だけではなく都市の住民においても、食糧消費の内容は在在地域の主な食糧生産作目に規定されている。これまで、中国の食糧消費の動向分析に関して、その地域の特徴に着目した調査研究は極めて乏しい²⁾。

そこで本論文では、農村住民の食糧消費統計に依拠して、主要食糧品目の構成から食糧消費の地域的区分を試み、特に小麦食圏における近年の米消費の動向を確認してみたい。さらに、92年以降の都市住民の食糧消費に関する公表統計が無いこともあり³⁾、

小麦食圏における大都市での米食の浸透状況に関して、河北省の省都である石家庄市の消費者アンケート調査から検証してみたい。

2. 食糧消費の地域性と米消費の動向

まず、食糧消費の内容は食糧生産の地域性を反映しており、各省の農村住民の主要な食糧消費品目は一般に省内の主要な食糧作目の加工品である。いま、06 年の各省別 (直轄市を含む) の統計によれば、食糧生産に占める米の生産量割合と農村住民の食糧消費に占める米消費量割合との相関係数は 0.94 と極めて高い。また、同一省内の都市住民と農村住民における主食食糧品目はおおよそ一致している。1991 年の各省別統計によれば、食糧消費に占める都市住民の米消費割合 (精米ベース) と農村住民の米消費割合 (粳ベース) との間には 0.95 という高い相関がある。

また、都市住民が省内の主要生産穀物を主に消費するという事は、相対的に当該品目の価格が他の食用穀物よりも低いと想定される。そこで、1991 年の省別データで、都市住民の食糧購入額に占める小麦粉の割合と、米に対する小麦価格の相対比との相関係数を求めると、-0.87 という高い逆相関が得られる。

なお、食糧消費の地域性や変化には、穀物生産の地域性や食糧品目間の価格関係、所得水準の向上という経済的要因に加えて、食習慣や食文化の地域性、調理器具の発達、生活様式の変化なども影響する。本論文では、これら諸要因の解明を棚上げにして、食糧消費の地域的多様性と変化を検証することに限定したい。

ここで、2006 年の消費統計に依拠して、米、小麦、その他雑穀等の消費割合から、省別の農村食糧消費の特徴を次の 5 つに分類してみよう。まず、食糧消費に占める米の割合が 80% 以上の諸省を「米主食圏」、50% 以上 80% 未満を「准米食圏」、小麦の消費割合が 70% 以上を「小麦主食圏」、50% 以上 70% 未満を「准小麦食圏」として、トウモロコシやアワ、コウリヤン等の雑穀や薯類の消費割合が高く、以上の類型のいずれにも属さない諸省を「混食圏」に分類する。

表 1 によれば、「米主食圏」に属する諸省は、米消費割合の高い順に列挙すると、海南、広東、湖南、江西、上海、広西、福建、浙江が 90% 以上で、重慶、四川の 80% 台と続く。これらの諸省は、91 年、01 年、

表 1. 農村住民の食糧消費形態別の米消費割合等

消費形態	省	米の消費割合 (%)			消費量 (kg/人)		指数 06/91
		1991 年	2001 年	2006 年	1991 年	2006 年	
小麦主食	青海	0.1	1.2	1.9	0.3	4.3	1433
	甘肅	0.6	1.4	2.1	1.5	5.5	367
	山東	1.5	1.9	3.3	3.3	6.7	203
	新疆	5.3	6.8	8.0	12.1	18.0	149
	河南	7.4	7.1	10.0	17.4	21.2	122
	寧夏	21.6	21.3	22.4	60.2	47.7	79
准小麦食	山西	1.6	3.3	5.5	3.7	11.2	303
	河北	3.8	6.1	9.5	8.5	18.0	212
	陕西	7.1	9.8	12.0	16.8	23.3	139
	天津	23.3	22.0	33.3	54.2	47.1	87
混食	内蒙古	5.7	14.4	23.0	16.2	45.5	281
	西藏	1.4	14.9	23.2	2.6	65.6	2523
	北京	20.2	27.2	36.1	38.7	40.0	103
	遼寧	38.9	42.4	48.3	97.8	93.7	96
准米食	吉林	44.1	38.4	50.2	134.0	101.8	76
	黒竜江	26.1	28.5	51.3	70.4	86.1	122
	安徽	62.7	61.7	62.9	165.5	132.3	80
	江蘇	72.7	65.6	69.7	205.1	152.5	74
	雲南	72.1	67.5	73.4	161.8	148.6	92
	貴州	70.6	70.1	74.5	167.6	139.1	83
	湖北	82.2	75.9	79.6	234.3	170.2	73
米主食	四川	76.3	74.8	81.0	193.4	171.0	88
	重慶	—	—	85.9	—	176.9	—
	浙江	92.3	93.4	91.4	246.9	165.1	67
	福建	89.9	83.5	92.2	234.9	186.9	80
	広西	92.4	91.5	93.2	226.7	171.5	76
	上海	98.2	94.1	94.7	271.2	152.1	56
	江西	95.7	91.0	95.9	316.9	244.1	77
	湖南	97.6	96.2	96.1	303.7	221.8	73
広東	95.1	90.9	96.3	236.4	207.2	88	
海南	95.8	92.7	96.7	218.2	202.2	93	
省別単純平均		46.7	48.6	52.4	124.0	105.7	85

注：各年度『中国農村住戸調査年鑑』より作成。

06 年で対比すると、米消費割合が 91 年ですでに現在の高い水準に達しており、1 人当たり年間消費量では近年、減少してきている。特に農村の都市化が急速に進展した上海では、91 年の 271 kg (粳ベース) から 06 年には 152 kg に激減している。大都市近郊における農村住民の所得水準の急上昇が、「食の多様化」により米消費を大幅に減らしたものと推測できる。

次に、「准米食圏」の諸省では、湖北、貴州、雲南が 70% 以上で、江蘇、安徽が 60% 以上、そして、黒竜江、吉林が 50% 台と続く。大半の諸省では、米の消費割合が 91 年と 06 年とでは大きな変化がない。食習慣として小麦 (江蘇、安徽) やトウモロコシ等 (貴州、雲南、吉林) が、食糧消費において今なお一定程度を占めている。但し、例外は 90 年代

に米生産を急増させた黒竜江で、米の消費割合は91年の26.1%から06年には51.3%に上昇しており、1人当たり米消費量においても70kgから86kgに増大している⁵⁾。

ここで、非米食圏における米食の動向を見てみよう。まず、「小麦主食圏」では、青海、甘肅、山東の米消費割合は、1.9%、2.1%、3.3%と極端に小さい。これに対して、新疆8.0%、河南10.0%がやや高く、しかも91年の5.3%、7.4%と比べるとやや増大傾向にある。他方、寧夏は22.4%と高いが91年対比でその割合に大きな変化がない。また、「准小麦食圏」では、06年現在で山西5.5%、河北9.5%、陝西21.0%であり、91年のそれぞれ1.6%、3.8%、7.1%に比べて増大している。なお、同分類に属する天津33.3%の高さは、地区内に稲作地域が革命以前よりあったためと思われる。他方、「混食圏」では、内蒙古(内モンゴル)、西藏(チベット)、北京、遼寧のいずれの諸省も2割強～5割弱と、非米食圏のなかでは米消費割合が高く、しかも91年対比で見ると増大傾向にある。特に、内蒙古(91年5.7%→06年23.0%)と西藏(1.4%→23.2%)で顕著な増加が目される。

以上のように、91年と06年の対比で見ると、小麦食圏(「小麦主食圏」,「准小麦食圏」)や「混食圏」では、現在の米食の消費割合はいまだ低いものの、傾向的には米消費が増えてきている。これに対して、米食の消費割合が高い米食圏(「米主食圏」,「准米食圏」)では、近年、1人当たりの米消費量は大幅に減少している。このような米消費の地域的特徴は、所得水準が高く食料消費の多様化が進んでいる都市住民において先行していると推測される。

そこで、特に小麦食圏における都市住民の米食普及の動向に関して、河北省の省都・石家庄市の消費者アンケート調査から探ってみたい。河北省の農村住民の米消費割合は、91年の3.1%から01年6.1%、06年9.5%と増大してきている。大都市の市街地住民では、米消費の増大傾向が農村住民よりも顕著に確認できるであろうか。

3. 石家庄における都市住民の米消費動向

(1) アンケート回答者の属性

石家庄市は人口955万人の大都市であるが、革命政権以後に、主に省外からの移入者によって人口が急増したといわれる⁶⁾。アンケートの回答者40名は20才代～60才代に分散している。職業・身分別の内訳では、農民12人、会社員9人、公務員6人、退職者3人、その他10人となっている。また、出身地(祖籍)では、河北省出身は7人に留まり、省外(15省)の出身者が多い。さらに主食圏出身別で分ければ、非米食圏は22人で、河北7、山東2、天津2、遼寧4、内蒙古2、河南1、北京3、寧夏1である。米食圏は18人で、黒竜江5、湖北1、湖南1、四川1、重慶3、広西1、江西4、雲南2となる。また、インディカ米(籼米)産地の出身者では12人(湖北1、湖南1、河南1、四川1、重慶3、広西1、江西4)、ジャポニカ米(粳米)産地では11人(黒竜江5、遼寧4、雲南2)、そして非稲作地域では17人(内蒙古2、河北7、山東2、天津2、北京3、寧夏1)であった。アンケートは年齢階層の分散を考慮して実施し、主な回答者はアンケートの配布・回収の協力者⁷⁾が所属する大学学生の両親と市内の公

表2. 1週間における主食品目回数ごとの回答者割合(石家庄)

回数 (日)	(%)											
	朝食				昼食				夕食			
	米食	「面食」	「粗糧」	その他	米食	「面食」	「粗糧」	その他	米食	「面食」	「粗糧」	その他
0回	5.0	7.5	45.0	60.0	0.0	22.5	60.0	95.0	2.5	20.0	57.5	77.5
1回	2.5	25.0	47.5	35.0	5.0	37.5	32.5	5.0	2.5	27.5	32.5	22.5
2回	15.0	37.5	7.5	5.0	2.5	17.5	7.5	0.0	7.5	25.0	10.0	0.0
3回	27.5	10.0	0.0	0.0	15.0	10.0	0.0	0.0	25.0	17.5	0.0	0.0
4回	25.0	7.5	0.0	0.0	12.5	7.5	0.0	0.0	10.0	2.5	0.0	0.0
5回	13.0	7.5	0.0	0.0	27.5	0.0	0.0	0.0	22.5	2.5	0.0	0.0
6回	5.0	0.0	0.0	0.0	17.5	5.0	0.0	0.0	12.5	5.0	0.0	0.0
7回	8.0	5.0	0.0	0.0	20.0	0.0	0.0	0.0	17.5	0.0	0.0	0.0

注：アンケート調査結果による。以下の表も同じ。

園で出会った住民である。

(2) 1 週間の主食構成の特徴

表 2 は、1 日 3 食の 1 週間における主食（食糧）品目回数ごとの回答者割合を示している。全体的傾向として、朝食は米食 2～4 回（平均約 3 回）、「面食」（麺、マントウ、餃子等）1～3 回、「粗糧」・その他 0～1 回、昼食では米食 3～7 回（平均約 5 回）、「面食」0～3 回、「粗糧」等 0～1 回、夕食では米食 3～7 回（平均約 4 回）、「面食」0～3 回、「粗糧」等 1～2 回となっている。3 食とも米食が主食としての頻度が最も多いこと、中でも昼食で米食志向が最も多い。但し、米食頻度は、昼食では 5 回と 7 回、夕食では 3 回と 5 回に分散している。他方、朝食では「面食」の頻度が相対的に多いという特徴がある。

ここで、表 3 によって、出身地（非米食圏と米食圏）による違いを見てみよう。まず、米食圏の出身者は当然ながら米食志向が多く、特に昼食ではほぼ毎日が米食である。他方、非米食圏の出身者では、朝食では「面食」と米食がほぼ半々であり、米食圏出身者より「面食」志向が多い。但し、昼食、夕食では米食が「面食」を上回っている。非米食圏の出身者は米食圏出身者よりも、小麦食志向がまだ強いものの、量的にはいまや米食が小麦食を凌駕している。

(3) 家庭での米の消費量

食事の場所では、朝食、昼食、夕食とも家庭が大半（回答者の 85%、88%、93%）で、昼食といえと

表 3. 1 週間の各主食の平均回数（出身地別）

(回)			
	出身地	米食	「面食」
朝食	非米食圏	2.8	2.9
	米食圏	4.6	1.6
	平均	3.6	2.3
昼食	非米食圏	3.9	2.4
	米食圏	6.1	0.7
	平均	4.9	1.6
夕食	非米食圏	3.7	2.3
	米食圏	5.3	1.3
	平均	4.4	1.8

注：非米食圏の出身者は 22 人、米食圏の出身者は 18 人である。

も外食は少ない。従って、米食の場所も家庭がほとんどである。米の購入場所は、スーパー 9、市場 9、「糧店」19、自給 1、未回答 2 となった。自宅購入量（回答 38 人）では、1 戸あたり年間 259 kg で、贈答米は 54 kg（当該回答 23 人平均では 89 kg）である。

また、米の 1 人当たり年間消費量（06 年現在）では、米食圏の米消費量は 84 kg であり非米食圏の出身者 69 kg の 1.2 倍になる。但し、両者の出身者ともに米の消費量は 10 年前、5 年前よりも増やしている。非米食圏では 10 年前の 56 kg（回答者平均）から 5 年前は 63 kg（同）と、5 年ごとに 6～7 kg 増えている。

他方、米食圏出身者では 10 年前の 69 kg から 5 年前は 79 kg というように、5 年ごとに見た場合、増大幅が前半の 10 kg から後半には 5 kg に縮小している。

なお、米食消費を増大させた時期では、米食圏の出身者では 70 年代（回答者 17 人のうち 9 人）、80 年代（同 6 人）に集中しており（平均 1975 年）、これに対し、非米食圏の出身者はそれに 4 年くらい遅れて 80 年代（回答者 22 人のうち 10 人）に集中している（平均 1979 年）。この特徴は、50 才以上の年配の回答者に限っても同様である。

さらに、表 4 によれば、米の消費量を増やした理由（複数回答）としては、「おいしさ」、「調理が便利」、「栄養豊富」の回答が多く、「炊飯器があるため」という回答も少なくない。ここで、非米食圏出身者では、「価格が安い」の指摘は少なく、「おいしさ」の指摘が最も多いことから、米食の食味嗜好がかなり浸透しているといえよう。

今後の米の消費増大意向（「今後、米の消費を増やすか」）に関しては、非米食圏で回答者の約 3 分の 2、米食圏では「現状維持」の回答が多数を占めた。なお、「どの程度増やすか」では、非米食圏出身者で 1～3 割が多く、米食圏出身者では 1 割がほとんどであった。そして、今後の米食増大志向において、年齢階層別の相違は無く、高齢者でも消費増の意向が多いという結果であった。

また、米の消費を増やす条件（1 つ選択、但し 2 人が複数選択）としては、「価格低下」4 や「収入増加」2 の回答は少なく、「もっと米がおいしくなったら」31 が大半を占めた。そして、「緑色大米」（有機米）の購入経験では、「無し」4 人、「たまたま買う」27 人、「良く買う」8 人という結果であった。

なお、米飯及び小麦、トウモロコシ加工品等の食

表 4. 米の消費量の増大理由, 増大意向

(人)				
(質問)	(回答)	非米食圏	米食圏	回答計
①米の消費量を増やした理由(複数回答)	おいしい	17	16	33
	調理が便利	16	12	28
	栄養豊富	14	14	28
	価格が安い	1	7	8
	炊飯器がある	6	5	11
	その他	3	1	4
②今後、米の消費を増やすか	増やす	14	6	20
	現状維持	6	8	14
	減らす	1	0	1
	分からない	1	4	5
③どの程度増やすか(食糧消費量全体に占める割合)	1割	4	7	11
	2割	5	1	6
	3割	4	0	4
	4割	2	0	2
	5割	0	1	1
	5割以上	2	0	2

注：③には、②の「現状維持」及び「分からない」の回答者も回答している。

糧品 8 種のなかで、嗜好の高い順序指摘で、1 位指摘では米飯が 30 人と回答者の 4 分の 3 を占め、以下、餃子 4 人、麵・マントウ各 2 人、トウモロコシ加工品・「餅」各 1 人、アワ・パン 0 人であった。但し、米飯以外の品目を 1 位指摘した回答者 10 人のうち、9 人が非米食圏の出身者である。また、子供の米食嗜好(回答 36 人)については、「好き」32 人、「嫌い」3 人、「不明」1 人というように、親の出身者に問わず子供世代は全般的に米飯志向が強いといえる。

以上のことから、都市部でも小麦食圏の出身者では、米食圏出身者よりも「面食」志向が強く残っている。但し、主食の消費頻度において、小麦食圏出身者でもいまや米食が小麦食を凌駕している。そして、米食嗜好が強まっており、粳米(ジャポニカ米)を主として今後の米食の増大志向が顕著に見られる。他方、一部の米食圏出身者には、米消費量の現状維持志向の多さから、近年、米食に飽和感が表れている⁸⁾。

(4) 粳米と籼米の選好性

次に、表 5 で粳米(ジャポニカ米)と籼米(インディカ米)の嗜好性について、出身地別に対比してみた。まず、「粘りの嗜好性」では、粘度嗜好が粳米産地の出身者で最も多く、低粘度嗜好は相対的に籼米産地の出身で多い。但し、籼米産地の出身者でも粘度嗜好が低粘度嗜好を上回る。なお、籼米・粳米の判別

表 5. 出身地別の粳米・籼米の嗜好性

(人)					
(質問)	(回答)	出身地			合計
		非稲作地域	粳米産地	籼米産地	
飯米の粘りに対する好み	粘りがあるのを好む	12	8	6	26
	粘りが低いのを好む	4	2	4	10
	どちらとも言えず	1	1	2	4
籼米と粳米の相違	分かる	12	6	8	26
	分からない	5	5	4	14
籼米の購入経験	有り	10	2	7	19
	無し	6	6	2	14
	未回答	1	3	3	7
粳米と籼米のどちらが好きか	粳米	12	6	5	23
	籼米	3	0	4	7
	どちらとも言えず	1	2	1	4
	未回答	1	3	2	6
回答者数		17	11	12	40

注：雲南では籼米と粳米生産が約半々なのだが粳米産地に入れた。回答者に雲南出身者が 2 人いる。

度では、非稲作地域の出身者において最も高い。

また、認知している産地ブランドの指摘(複数回答)では、東北産の粳米が多く、黒竜江米 32 人、天津小站米 22 人、吉林梅河米 17 人、東北米 10 人、泰国香米 9 人となった(他は 3 人以下の回答)。さらに、籼米の購入経験者は、出身地を反映して、籼米産地出身者では回答者 9 人のうち 7 人を占め、粳米産地では回答者 8 人のうち 2 人に留まっている。そして、籼米より粳米を選好する回答者は粳米産地及び非稲作地域では多数であり、籼米産地 < 非稲作地域 < 粳米産地というように序列づけられる。但し、籼米産地の出身者でも約半数が粳米嗜好であることが注目される。

なお、市内最大の米の卸売市場(5 年前に開設)や市内の総合スーパーの食品売場では、「天津米」や「泰国(タイ)米」が散見されるものの、大半は東北産米が占めていた。また、卸売市場内の米販売業者の 1 人は、黒竜江省で精米工場を親類縁者と共同経営しており、本人は石家庄での販売を担当していた。そして、産地の精米工場では、インターネット(HP)での宣伝を通して中国全土に販売してい

るといふ。以上、石家庄市内の米消費で、東北産米(粳米)が主であることは、卸・小売りの面においても確認できる。

4. まとめ

中国における食糧消費の地域性に関して、『中国農村住戸調査年鑑』に依拠して、農村住民の米・小麦等の消費割合から、各省を「米主食圏」、「准米食圏」、「小麦主食圏」、「准小麦食圏」、「混食圏」の5つに分類してみた。そして、91年、01年、06年の対比から、米消費の動向を見てみると、91年時点ですでに米消費割合の高い米食圏では、所得水準の向上にともなう「食料消費の多様化」から、近年、1人当たりの米消費量を減少させている。これに対して、小麦食圏及び「混食圏」では、多くの省で米の消費を増大させている。非米食圏の農村住民におけるこのような米消費の増大傾向は、むしろ、当該省内の都市住民において先行しているものと推測できる。

そこで、農村住民の食糧消費では小麦主食圏に属する河北省の省都・石家庄において、消費者アンケート調査を試みた。その結果、アンケートの回答者では、1日3食の主食頻度で米食が小麦食等よりも多いことが確認された。その背景として、小麦食圏の出身者には、米食圏出身者よりも「面食」志向が強いが、近年、米食嗜好が顕著に増大しており、現在ではすでに米食が主食の過半以上を占めている。そして、今後の米消費量の増大志向は米食圏出身者よりも多く、増やしたい量も大きい。また、子供世代の米食嗜好は親世代よりも浸透しており、このような点から今後とも小麦食圏における都市住民の米消費がさらに増大し続けよう。但し、このような仮説を一般化するためには、非米食圏の諸省の都市で、さらに消費者アンケート調査を重ねる必要がある。

ところで、米飯の粘度嗜好、粳米(ジャポニカ米)と籼米(インディカ米)の選好や購入経験では、粳米産地と籼米産地の出身者で違いがあるものの、粘度嗜好や粳米嗜好は籼米産地の出身者でも多いことが分かった。この点に関連して、今後の調査研究課題として、長江以南の籼米産地の都市住民において、現在、粳米の消費がどの程度、浸透しているかについて、生産及び流通面とともにその実態を探ってみたい。

注 1) 中国でいう「糧食」(食糧)には、「細糧」(小麦、米)、

「粗糧」(トウモロコシ、高粱、アワ、その他雑穀、豆類)に加えて、イモ類が含まれる。

- 2) 中国の食糧消費の地域性に着目し、統計的に地域分類した文献として、銭 子平「中国の米消費」『農業と経済』第69巻第7号(2003年6月)がある。都市住民を対象に91年の統計で、米消費地域(米/(米+麦)が70%以上、江蘇、安徽、湖北、四川以南)、小麦・米の混食地域(米が40~60%、東北3省)、小麦食地域(同25%以下、寧夏、西藏等西北部)に分類している。
- 3) 食糧品目別の消費統計は、都市住民の統計に関しては、1991年までの『中国城鎮居民家庭収支調査統計年鑑』に掲載されているが、復刊された96年以降の同年鑑には当該統計が無い。これに対して農村住民の食糧消費統計は、各年度の『中国農村住戸調査年鑑』に掲載されている。
- 4) 上記注3の理由によるデータの制約で、91年についてのみ、都市と農村住民の食糧消費の相関性が統計的に検証できる。
- 5) 黒竜江省における米食の増大過程やその背景については、邵 娜・青柳 斉「中国東北の米の消費構造に関する一考察」『農林業問題研究』第44巻第1号(2008年)を参照されたい。
- 6) 石家庄市は清朝末期までは小さな村にすぎなかった。その後、紡績業や製粉業の発展にともない、また交通の要衝として、第一次大戦後に旧称の石門市に昇格した。そして、1948年に石家庄市に改称し、68年に保定市から石家庄市に省都が移り、その後の紡績、機械、化学工業の発展により都市人口が膨張してきた。このような経緯から、石家庄市は省外からの移入者が多い。
- 7) アンケート調査では市在住のR氏から協力を得た。氏は64才で現在は市内の大学教授であるが、60才までは省社会科学院の主任研究員であった。
- 8) 調査協力者のR氏は河北省秦皇島の出身で、大学と卒業後の工場勤務10年間は吉林省で過ごしている。吉林省在住時は、80年頃までの主食は高粱やトウモロコシで、80年代初めから米が主食になってきたという。当時の石家庄ではトウモロコシ、高粱からマントウ等に変っていた。80年代後半になって徐々に米飯が普及してきたという。氏は84年に石家庄に移住するが、妻が吉林省の出身で米食嗜好が強いこともあって、移住時からすでに米食を増やしたという。なお、87年頃になると、食糧事情が緩和され米・小麦が自由に購入できた。また、90年代半ば頃から、職場から黒竜江産米が配給される。95年に電気釜を購入してからは、毎日が米食になる。妻によれば、電気釜の登場が米食頻度を明らかに増やしたという。以前はガス釜であったが、炊飯中にその場に居て火加減を調節する面倒さがあった。